

中心無き世界 vol.2

弦が運ぶもの



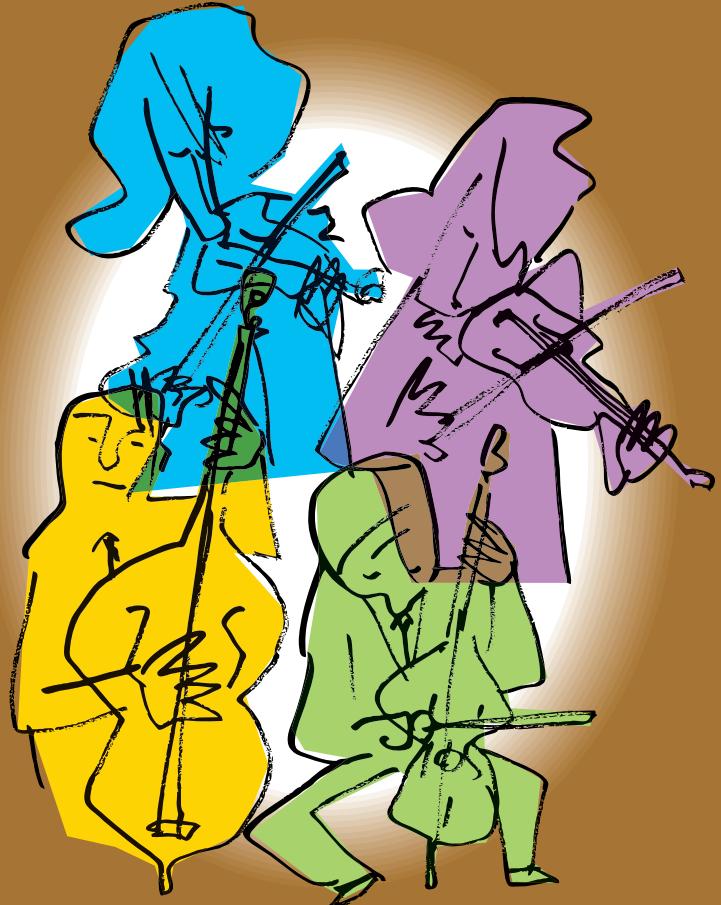
ENSEMBLE NOMAD

アンサンブル・ノマド
2021 ▶ 2022

定期演奏会#74 ~中心無き世界Vol.3~ 人びとの登
2022年1月30日(日) 於:東京オペラシティリサイタルホール

入野賞 第3回室内楽受賞作品コンサート

2021年11月12日(金) 於:府中の森芸術劇場 ウィーンホール



2021年10月11日(月) 18:30開場 19:00開演
会場:東京オペラシティリサイタルホール

主催／一般社団法人 アンサンブル・ノマド <http://www.ensemble-nomad.com/>

助成／公益財団法人 ローム ミュージック ファンデーション NOMURA FOUNDATION 公益財団法人 花王 芸術・科学財団

公益財団法人 朝日新聞文化財団

マネジメント／keynote

Ensemble NOMAD



© Maki Takagi

アンサンブル・ノマドのあるセクションに焦点を当てた初めてのプログラムとなる。名手揃いのノマド・メンバーを身近にしてきて、2017年の設立20周年ではその個人技を発揮するコンチェルトのソリストとして登場して頂いたが、今回は弦のセクションに焦点を当てたプログラムを組んだ。(管楽器、打楽器、ピアノなどのセクションを日々特集する計画もあり)。

これまでノマドの弦楽アンサンブルを指揮者として、また一聴衆として聴く機会も何度かあったが、いつも集まって頂く素晴らしいゲストと創り出す音響と柔軟な演奏に魅了され、いつか弦楽アンサンブルを特集し、思う存分一緒に演奏してみたいとの思いが芽生えた。今回もノマド・メンバーと常連のゲスト、そして新たに若いゲストに加わって頂いて演奏するのは1946年作のストラヴィンスキーから今年3月に発表されたばかりのスペイン・バスク出身のイニヤキ・エストラーダまで、実に70年余りの期間に作曲されたものである。また今回は、ミラノの作曲家ジョルジオ・コロンボ・タッカーニのハード・ロックという意味のファゴットと弦楽アンサンブル作品を長年ノマドとお付き合い下さっている塚原里江さんと演奏出来るのも大きな楽しみである。

佐藤紀雄

コロナ禍でのアンサンブル・ノマドの活動に対し、下記の方々から
ご寄付を頂戴いたしました。紙面を借りて、心より御礼申し上げます。

わたなべひろこ様 阿部利彦様

プログラム

1. I.ストラヴィンスキー：弦楽のための協奏曲二長調（1946）

Igor Stravinsky: Concerto in D for String Orchestra

野口千代光・川口静華・大鹿由希・原田亮子 (violin I) 花田和加子・対馬佳祐・松岡麻衣子・河村絢音 (violin II)
 甲斐史子・阿部 哲・齊藤 彩 (viola) 菊地知也・松本卓以・細井 唯 (cello) 佐藤洋嗣 (double bass)
 佐藤紀雄 (conductor)

2. 武満 徹：ソン・カリグラフィ I、II、III（1958-60）

Toru Takemitsu: Le Son Calligraphie I, II, III

野口千代光 (violin I) 川口静華 (violin II) 花田和加子 (violin III) 松岡麻衣子 (violin IV) 甲斐史子 (viola I)
 阿部 哲 (viola II) 菊地知也 (cello I) 松本卓以 (cello II) 佐藤紀雄 (conductor)

3. I.エストラーダ・トリオ：果樹園での祈り～ガジェゴ・ベノの4つの詩による（2021）～日本初演

Iñaki Estrada Torío: Oración en el huerto on four poems of Gallego Benot

野口千代光 (violin I) 花田和加子 (violin II) 川口静華 (violin III) 大鹿由希 (violin IV) 対馬佳祐 (violin V)
 松岡麻衣子 (violin VI) 甲斐史子 (viola I) 阿部 哲 (viola II) 齊藤 彩 (viola III) 菊地知也 (cello I)
 細井 唯 (cello II) 佐藤洋嗣 (double bass) 佐藤紀雄 (conductor)

4. G.C.タッカーニ：ドゥーラ・ロッチャ～ファゴットと弦楽合奏のための（2012）

Giorgio Colombo Taccani: Dura Roccia per fagotto e orchestra d'archi

Solo: 塚原里江 (bassoon)
 野口千代光・対馬佳祐 (violin I) 花田和加子・大鹿由希 (violin II) 甲斐史子・齊藤 彩 (viola)
 菊地知也・細井 唯 (cello) 佐藤洋嗣 (double bass) 佐藤紀雄 (conductor)

5. 近藤 讓：クイックステップと緩やかな終結（1996）

Jo Kondo: Quickstep and Slow Ending

野口千代光 (violin I) 花田和加子 (violin II) 川口静華 (violin III) 大鹿由希 (violin IV) 対馬佳祐 (violin V)
 松岡麻衣子 (violin VI) 原田亮子 (violin VII) 河村絢音 (violin VIII) 甲斐史子 (viola I) 阿部 哲 (viola II)
 齊藤 彩 (viola III) 菊地知也 (cello I) 松本卓以 (cello II) 細井 唯 (cello III) 佐藤洋嗣 (double bass)
 佐藤紀雄 (conductor)

6. C.ヴィヴィエ：ジパング（1980）

Claude Vivier: Zipangu

野口千代光 (violin I) 花田和加子 (violin II) 対馬佳祐 (violin III) 川口静華 (violin IV) 大鹿由希 (violin V)
 松岡麻衣子 (violin VI) 河村絢音 (violin VII) 甲斐史子 (viola I) 阿部 哲 (viola II) 齊藤 彩 (viola III)
 菊地知也 (cello I) 松本卓以 (cello II) 佐藤洋嗣 (double bass) 佐藤紀雄 (conductor)

————— 休憩 —————

プログラムノート

1. ストラヴィンスキー(1982~1971)：弦楽のための協奏曲 二長調(1946)

ストラヴィンスキー64歳の年にパウル・ザッハーの委嘱によって作曲された。スイスのバーゼルに生まれたパウル・ザッハー(1906~1999)は多額の財産を古楽の発展や同時代を代表する作曲家への委嘱に盛んに費やした篤志家であった。委嘱した作曲家の中にはバルトーク、ブーレーズ、ヒンデミット、エリオット・カーターなどがあり、そこから多くの傑作が生まれ現在でも世界中の音楽愛好家の耳を愉しませている。武満徹の『ユーカリップス』もその委嘱によって作曲された。

1910年からの約10年間の間に『火の鳥』『春の祭典』、そして『きつね』『兵士の物語』など主に故郷ロシアの風俗、民話を題材にした作品を作曲していたストラヴィンスキーは、1920年に発表したイタリア・バロック風の曲『ブルチネルラ』を皮切りに突如新古典主義音楽を作曲し始め、実に30年間その作風で作品を書き続けた。古典主義に向かった切っ掛けは単純にイタリア、特にナポリやベネツィアのバロック時代の音楽への傾倒と偏愛であったが、生まれた多くの傑作は音楽語法の深い研究から得た成果の発露であった。バロック時代の作曲家の和声やリズム、そして旋律のオリジナルの痕跡の上に複数の複雑に屈折する多数の鏡をかざす様なキュビズムの手法を思わせるストラヴィンスキー一流の意匠をほどこすこの『弦楽のための協奏曲』はその時代の典型的なものひとつだ。

佐藤紀雄

2. 武満 徹(1930~1996)：ソン・カリグラフィ I.II.III(1958~1960)

正式には『8つの弦楽器のためのソン・カリグラフィ』と言われるべきなのかも知れないが、連作を書くつもりで1958年、武満28才の時に書き始めたものの1960年に発表したIIIまで終わる。芥川也寸志に献呈されたIは1958に軽井沢現代日本音楽祭で行われた作曲コンクールで一位を受賞し、同時にフランス大使賞ほか二賞を得た。IIは同年11月にラモー室内楽団『現代作品を聴く会』で、またIIIは1960年4月に行われた「作曲家集団」の武満プログラムの中で初演された(新潮社出版『音、沈黙と測りあえるほどに』巻末の秋山邦晴・編の武満徹年譜による)。

8つの弦楽器は二組の弦楽四重奏から成り、この二組のグループのあいだで様々な呼び交わしが行われる。各奏者はどちらかのグループの一員であると同時にソリストとして自由に自分の歌を奏てる存在でもある。遠くの楽器同士で、時には同じグループ内で小さな旋律を投げ交わしがあるかと思えば、全体がひとつになって豊かな響きの流れを作ることもあり、大きな画布に毛筆で奔放に描かれた書の筆跡を克明になぞった、視覚を暗示する作品のように聞こえなくもないだろう。二組のグループを構成する8人は演奏中離合集散を繰り返しながら、様々なかたちの跡を残してゆく。

佐藤紀雄

3. I.エストラーダ・トリオ(1977~)：果樹園での祈り

～ガジェゴ・ベノの4つの詩による(2021)～日本初演

『果樹園での祈り』は、この曲を捧げたアシエル・プガが芸術監督をつとめるグレゴリオ・ソラバリエッタ室内オーケストラの委嘱で12人のソロ弦楽器奏者のために書いた作品であり、ホアン・ガジェゴ・ベノの同名の詩集にインスピライアされたものである。この曲はベノの4つの詩に基づいてはいるが、詩の内容を曲に具現化したものではなく、詩に内包された自らが選び己に課した、愛する者の不在と欠落、そして孤独という詩情を演出的に表現したものである。

詩人や作家とのコラボレーションで作曲したこれまでの私の音楽と同様、『果樹園での祈り』はガジェゴ・ベノが発した詩情を私個人の経験や興味といったフィルターを通して自ら探ったものである。そこには音に関する探究、すなわち何で構成され、どう私の思考に影響を与えるかという要素が含まれており、曲に私の想いを盛り込むのではなく、聴くものそれぞれが自身の体験に基づいて解釈できるよう意図されている。音色や音域、エネルギー感についての作品であり、瞑想時の呼吸のような静的場面の並列に喩えられる。私は長い間振動、音と音の間の相互作用について追及してきた。音程がずれた瞬間に振動が存在することに興味を抱き、結果全ての楽器が調子はずれになる書き方が生まれたのだが、それは同時に音の基準がより正確に明確化されるようアレンジもされている。

私はこれまで、ある特定の響きに対して何をどう感じるか、どう反応するかを常に自問しながら曲をつくってきた。もちろん、それは聴くものによって様々に異なるものだが、その違いこそが驚異といえるのではないだろうか。

今回私の作品に取り組んでくれた佐藤紀雄とアンサンブル・ノマドのメンバーに対し、本紙面を借りて感謝を申し上げたい。東京に行くことができず残念だが、作品の音を介して、私の一部が皆さんの中で共鳴してくれるることを願っている。

I.エストラーダ・トリオ(訳:花田和加子)

I. いくつもの名前

あなたのため、わたしは
あらゆる場所を彷徨した
雲に覆われたすべての境界の地、柔らかさに疲れ果てた海、
時ならぬ鉄の原野。
わたしは詠った
虚空に向かって、
世界の歓びに向かって、あなたのためならこの魂を
すべてのものを捧げられると。
今日、太陽は
活きいきと輝く
残酷な夏
あなたは他のだれかかもしれない：わたしの歌はひどく退屈だから…
あなたはまだ他のだれにでもなれる、ここは違う流れの中で、
休まることのない、暑く悲しい日々の中で。

II.

あなたの樞で目覚めるより、この佇まいの中で
今日は長い夜を待っていたい。わたしは海原を求めない：
あなたの流れる滋養がわたしを満たすから。
華立てに潤うあなたの唇
それがわたしの求めるもの、あなたの華々に捉えられた怒りは
もはやあらゆる平原を覆いつくす。わたしの蔓草はあなたの滑らかな肢体に種子を蒔く；
わたしの虚な掌の中で、あなたの喉首は身じろぎもしない。
もしわたしが、広場の汚れなき片隅にある秘められた場所に
あなたを見つめるために戻らなければならないとしたら、
あなたの脊柱の種をこの手の中に握りしめていこう。
いかに傷つけ、いかに愛するかをわたしは知っている。わたしは夏に熟れる果実を待つことができる。
歓びに溢れる春は、わたしを鎮める黒鳥に耳を傾ける。

VII

わたしはいまもお前をわが良心に留めている
あまたの男たちの中で。
我が愛しの男の子、果実の甘い鞭；新たな血流；
新たなる種；
地上の光；
安らぎの宿；
男；わたしのからだの水路
そして男；
空中の鳥は、「存在」の咽び泣きに冠をささげる

XXIX

木立に囲まれ、わたしはあなたに語りかける。
あなたの声は記憶。元に戻る術をわたしは知っているのだろうか？あなたがわたしに
明かした雨は、わたしの名前を告げる。あなたは明らかにする
すべてのものに名前をつけて。
わたしは、与えられたこの新しい体によって、より良く生きる術を知るだろう。わたしは再び
知ることになる（再びあなたが解き明かしてくれる）
あの広漠とした神秘
そしてあなたはわたしと共に笑ってくれる：
しかし今のわたしは、ただ森に吹く風の匂いを知っているだけ。

ガジェゴ・ベノ『果樹園での祈り』より（訳：花田和加子）

4. G.C.タッカーニ(1961～)：ドゥーラ・ローチャ～ファゴットと弦楽合奏のための(2012)

『ドゥーラ・ローチャ』は、私が長年低音楽器に抱いてきた興味の新たな一步となる作品である。タイトル(イタリア語で“ハード・ロック”を意味する)は、この曲の粗くアグレッシブなキャラクターを表している。2つの対照的な要素が交互に展開される:1つはカデンツァ的で激しい雰囲気のソロ・パートに基づくものであり、2つ目はそれとは対照的な協和的で抒情的な性格の要素である—でもそれは常に水面下の分裂に向かう流れによって覆される。この対立が終始曲を支配し、弦楽器は常にファゴットの提示したものを拡大したり展開したりする。終結部でソリストがパラドックス的な高音を奏でる下で、弦楽器はそれ以上歩みを推し進めることもできず最後の言葉を吐く。

G.C.タッカーニ(訳:花田和加子)

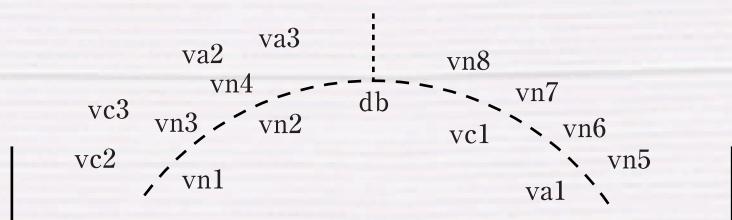
5. 近藤 謙(1947～)：クイックステップと緩やかな終結(1996)

弦楽合奏のためのこの作品は、題名の「クイックステップ」が暗示するように、軽快なリズムを特徴とするダンス的性格に支配されている。とはいっても、この音楽は実際に踊るためのダンス曲ではない。ここには、ダンスの安定したステップを可能にするような周期的な拍子はない。それどころか、拍子は、ほとんど小節ごとに目まぐるしく変化し、そして、その絶えざる変化の中から、いくつかの異なった拍子が同時に存在するよう(つまり、「複拍子」的な)効果が現れる。この作品は、言わば、抽象的なリズムの遊戯である。

15の弦楽器は、4つのグループに分けてステージ上に配置される。前列左に第1と第2ヴァイオリン、そして、前列右には第1ヴィオラ、第1チェロとコントラバス。後列左にそれぞれ2本ずつのヴァイオリン、ヴィオラ、チェロが座り、それに対し、後列右には4本のヴァイオリンが位置する。そして、この曲では、そうしたグループ間の対比、即ち、前列と後列、右と左という対比が大いに活用されている。このような、楽器群の対比的な取扱は、この作品にパロディ的な意味での協奏曲的性格を与えていた。したがって、この曲を、一種の「室内協奏曲」(「教会協奏曲」に対するものとしての)と呼んだとしても、それほど外れではないかもしれない。

この作品は、鎌倉市芸術文化振興財団の委嘱によって、1996年6月に作曲。同年7月に、鎌倉芸術館ソリステン(指揮:佐藤紀雄)によって鎌倉で初演された。

近藤 謙

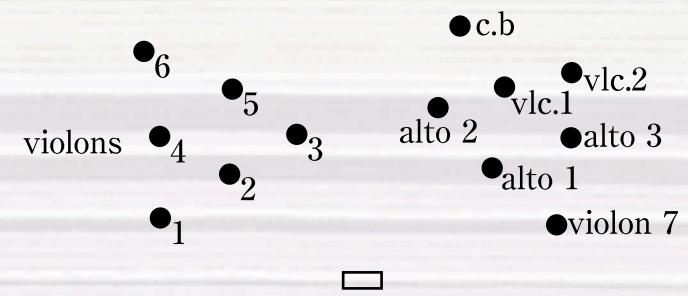


6. C.ヴィヴィエ(1948～1983)：ジバング(1980)

34歳の若さで悲劇的な死を遂げた作曲家ヴィヴィエはカナダのモントリオール出身で、70年代にシュトックハウゼンの元で作曲の勉強をしていた。作品の特徴である一つの旋律を多彩な和声づけと対旋律の大膽かつ型破りな重ね合いによって長大な流れをつくる方法は、未だに他に例をみない唯一無二の魅力に溢れている。そこには作曲家自身の東南アジアからシルクロードの旅で出会った音や香り、そして過去の旅人たちの記憶の幻影までが反映している。主要な作品の殆どは晩年の10数年間(21～33歳)に集中して作曲されているが、『シラズ』『ジバング』『ブカラ』『サマルカンド』『マルコ・ポーロ』『ブラウ・デワタ(神々の島)』などシルクロードやアジアをイメージしたタイトルが目立ち、ヴィヴィエがいかに作品の発想を自らの体験に負っているかがわかる。

この『ジバング』は唯一の弦楽アンサンブル作品であるが、以下が演奏の独特的な楽器配置図である。ステージに向かって左に6人のヴァイオリン奏者が三角形に、右には最前列のヴァイオリンから奥のコントラバスまで約5オクターブに亘る音域をカバーするグループが配されている。このダイナミックな配置から様々な旋律のうねりのドラマが繰り広げられ、マルコ・ポーロ時代の日本・ジバングへ、きくものの空想の翼を広げてくれる。

佐藤紀雄



出演者プロフィール

Ensemble NOMAD

1997年、ギタリスト佐藤紀雄の呼びかけによって集まった、無類の個性豊かな演奏家によって結成されたアンサンブル。「NOMAD」(遊牧、漂流)の名にふさわしく、時代やジャンルを超えた幅広いレパートリーを自在に採り上げ、斬新なアイデアやテーマによるプログラムによって独自の世界を表現するアンサンブルとして内外から注目されてきた。2002年に行った定期演奏会「ケージとメシアンの間で交わす自然と宇宙に関する往復書簡」は大きな反響をよび、サントリー音楽財団「第2回佐治敬三賞」を、2015年に行った定期演奏会「再生へVol.3:祈りへエストニアから震災復興を祈るコンサート」により「ウィーン・フィル&サントリー音楽復興祈念賞」を受賞した。海外からの招待も多く、2000年オランダの「ガウデアムス音楽週間」、2003年ベネズエラで行なわれた「フェスティバル・アンテンポ」、2005年11月パリで行われた「フェスティバル・アンテンポ」およびイギリスの「ハダースフィールド現代音楽祭」、2007年にはメキシコの「モレリア音楽祭」、また2008年10月にはソウルでの「パン・ムジーク・フェスティヴァル」などに出演。2009年秋には、中国の北京首都師範大学、北京中央音楽学院、四川音楽学院で中国人作品を中心としたプログラムの公演を行ない、好評を博した。2011年には2度目の韓国公演を開催。2013年7月にはエストニアとオランダで公演を開催。2014年にはメキシコのセルバンティーノ音楽祭に日本を代表するアンサンブルの1つとして招聘された。2015年12月に再び中国四川公演を行い、今後も中国、オランダやフランス、メキシコなどの公演を予定している。

また、近年ではアウトリーチ活動にも積極的に取り組み、保育所、病院、小学校、特別支援学校等で訪問コンサートやワークショップを行なっている。

CDは、近藤 譲「梶子」(ALCD-47)、「空の眺め」(ALCD-57)、「オリエント・オリエンテーション」(ALCD-67)、「表面・奥行き・色彩」(ALCD-93)、石田秀実「神聖な杜の湿り気を運ぶもの」(ALCD-60)、池辺晋一郎「炎の資格」(CMCD-28121)、福士則夫「花降る森」(CMCD-28128)が発売されている他、藤倉 大の「Turtle Totem」、「Diamond Dust」、「Glorious Clouds」にもライブ録音が収録されている。海外では2011年秋にエベルト・バスケスの「Bestiario(動物寓話集)」、2015年秋に「Pruebas de vida(生命の証)」がリリースされている。2014年にはオリジナル・アルバム「めぐる-Meguru」を発売。2015年夏から秋にリリースされた「現代中国の作曲家たち」シリーズは、レコード芸術誌の特選盤や朝日新聞の「for your collection」推薦盤に選ばれている。

公式ウェブサイト:www.ensemble-nomad.com/



佐藤紀雄 Norio SATO (指揮)

1971年(現)東京国際ギターコンクール優勝。ギター奏者、指揮者として内外の現代作品の演奏、初演を手掛けている。1997年にアンサンブル・ノマドを結成し、音楽監督に就任。世界各地の主要現代音楽祭に出演。これまでに京都音楽賞、中島健蔵賞、朝日現代音楽賞を受賞。ソロ、アンサンブルのCDも多数リリースしている。現在、日本大学芸術学部、桐朋学園芸術短期大学で後進の指導にあたっている。



野口千代光 Chiyoko NOGUCHI (ヴァイオリン)

東京藝術大学在学中にジュリアード音楽院へ留学。ジュリアード・コンチェルコンペティション優勝。アーティスト・イン・ナショナルオーディション優勝、ヤングアーティスト・デビュー賞を受賞。カーネギー・ワイルホールにおいてニューヨークリサイタルデビュー。ジュリアード音楽院卒業後、東京藝術大学に復学し首席で卒業。在京オーケストラのゲストコンサトミストレス、アンサンブル・コレディエ(旧東京・プリステン)コンサートミストレス、紀尾井ホール室内管弦楽団、カルテット・プラチナムのメンバー。東京藝術大学音楽学部教授、日本大学藝術学部客員教授、桐朋学園芸術短期大学講師。



花田和加子 Wakako HANADA (ヴァイオリン)

英国王立音楽カレッジのディプロマを取得。オックスフォード大学音楽学部卒業、東京藝術大学大学院修士課程修了。1999年度村松賞受賞。アンサンブル東風、アンサンブル・コンテンポラリーαのメンバーとして、古典から現代まで幅広いレパートリーで演奏活動を行っている。東京藝術大学、桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。(財)地域創造公共ホール室内楽活性化事業コーディネーター。サントリホール室内楽アカデミーフェシリテーター。



甲斐史子 Fumiko KAI (ヴィオラ)

桐朋学園音楽大学、同大学研究科修了。第3回江藤俊哉ヴァイオリン・コンクール第1位入賞。現代音楽演奏コンクール〈競楽V〉にて、ピアノの大須賀かおりとのデュオで第1位入賞。第12回朝日現代音楽賞、2003年度青山バロックザール賞、ドイツ・ダルムシュタットにてクライニヒュタigner賞を受賞。国内外の音楽祭に出演するほか、数々の初演、録音を行っている。神奈川県立弥栄高校、東京藝術大学非常勤講師。



菊地知也 Tomoya KIKUCHI (チェロ)

第60回日本音楽コンクール第1位、併せて増澤賞、特別賞受賞。第4回日本室内楽コンクール第1位。第1回全日本ビバホールチェロコンクール第1位。霧島国際音楽祭など多くの音楽祭に参加。紀尾井ホール室内管弦楽団、アンサンブル・ノマド、アクロス弦楽合奏団、カルテット・プラチナムのメンバー。東京藝術大学、桐朋学園大学、桐朋学園芸術短期大学非常勤講師。日本フィルハーモニー交響楽団ソロ・チェリスト。日本チェロ協会評議委員。



佐藤洋嗣 Yoji SATO (コントラバス)

2006年東京音楽大学卒業。コントラバス奏者として、PMF(パシフィック・ミュージック・フェスティバル)2005年に参加。室内楽、オーケストラをはじめ、コンポージュムや サントリー・サマーフェスティバルなど、現代音楽の演奏会にも多数出演している。また、アルゼンチン・タンゴのバンドにも出演するなど、さまざまな音楽へのアプローチを試みている。

GUESTS

塚原里江 Rie TSUKAHARA (ファゴット)



東京藝術大学、同大学院修了。在学中東京藝術大学オーケストラと共に演奏。1991年の長野アスペン音楽祭への参加を機に、アメリカコロラド州アスペン音楽祭に招待された。1998年、及び、2004年のリサイタルでは現代音楽を中心とした意欲的なプログラムが話題を呼んだ。2013年には韓国大邱国際現代音楽祭に招待され、ソロ作品を演奏、好評を博した。これまでに各地のオーケストラ、アンサンブル等と共に演奏しつつ、様々な現代音楽の演奏会に出演している。ファゴットを岡崎耕治、中川良平、ハロルド・ゴルツァーの各氏に師事。

川口静華 Shizuka KAWAGUCHI (ヴァイオリン)



東京藝術大学附属音楽高校を経て、東京藝術大学を卒業。同大学院修士課程を修了。奨学生を得て、米国コロラド州アスペン音楽祭に参加。江藤俊哉ヴァイオリンコンクール第2位入賞。日本フィルハーモニーと共に演奏。倉敷音楽祭や宮崎国際音楽祭などに出演。日本演奏連盟主催のデビューリサイタルでは好評を得た。今までに、久保田良作、沼田園子、海野義雄、田中千香士、漆原啓子の各氏に師事。現在、幅広い分野で演奏活動を行っている。

松岡麻衣子 Maiko MATSUOKA (ヴァイオリン)



桐朋学園大学音楽学部演奏学科卒業、同大学研究科修了。2008年に渡独、IEMA (フランクフルト音楽・舞台芸術大学) にて研鑽を積んだ後、アンサンブル・リネア、アンサンブル・モデルン等の現代音楽演奏団体で、欧州を中心に世界各地の主要な現代音楽祭に招聘される。現代音楽演奏コンクール「競楽XII」2位。2013年帰国後も、同時代の作品演奏に多数携わるほか、他ジャンルのアーティストとの活動も積極的に行っている。

対馬佳祐 Keisuke TSUSHIMA (ヴァイオリン)



東京藝術大学を経てパリ国立高等音楽院ヴァイオリン科を首席で卒業。同音楽院修士課程室内楽科修了。第8回江藤俊哉ヴァイオリンコンクール第1位。2010年フランス・バッハ国際音楽コンクール第1位。2014年リヨン国際室内楽コンクール・デュオ部門にて最優秀現代曲賞受賞。2016年ルーマニア国際音楽コンクールにてグランプリ(全部門最優秀賞)受賞。玉井菜採、田中千香士、ジェラール・プーレ、ボリス・ガルリツキーの各氏に師事。現在N響団友オーケストラコンサートマスター、ヴィルタス・クワルテット、東京バロックプレイヤーズメンバー。

大鹿由希 Yuki OHSHIKA (ヴァイオリン)



桐朋学園大学音楽学部を卒業。1996年江藤俊哉ヴァイオリン・コンクール優勝、1998年日本モーツアルト音楽大賞を受賞。2002年NHK交響楽団に入団。オーケストラ、室内楽奏者として古楽から現代まで幅広く活動している。2018年度文化庁新進芸術家海外研修員としてウィーンに派遣され研鑽を積む。ウィーン私立音楽芸術大学にて古楽を学ぶ。オチーノ・カルテットのメンバー。

河村絢音 Ayane KAWAMURA (ヴァイオリン)



桐朋女子高等学校音楽科を卒業後、パリ国立高等音楽院第一、第二(修士)課程を経て、第三課程 現代音楽演奏科に在籍。同時にフランクフルト音楽大学にて修士を取得。文化庁新進芸術家海外研修、フランス政府給費、Meyer財団等の助成を受ける。東京藝術大学大学院博士後期課程1年に在籍。パリ管弦楽団アカデミーを経て、その後エキストラとして度々演奏。アンテルコンテンポラントやライブエレクトロニクスとの演奏、初演の他、パリ・フィルハーモニーでのプレリュードコンサートをはじめ、欧州のフェスティバル(メシアン、ファンテーヌブロー、ダルムシュタット、Traiettorie、Klangspuren)等で演奏。

原田亮子 Ryoko HARADA (ヴァイオリン)



桐朋学園大学を卒業後、(公財)ロームミュージックファンデーション奨学生として、英国王立音楽院、ギルドホール演劇音楽学校を最優秀にて卒業。11~14年兵庫芸術文化センター管弦楽団でフォアシップラーを務め、現在、オーケストラへの客演のほか、コンサートシリーズを企画・主催するなど、全国各地での演奏活動に力を入れている。2019年、CD「音の万華鏡」(ギター・佐藤紀雄氏とデュオ)をALM recordsよりリリース。

阿部 哲 Satoru ABE (ヴィオラ)



東京都出身。東京藝術大学附属音楽高校、東京藝術大学卒業、同大学院修了。ヴィオラを菅沼準二、川和憲、市坪俊彦の各氏に師事。室内楽を岡山潔、クロード・ルローン、各氏に師事。室内楽演奏に積極的に取り組む他、在京のオーケストラを中心に客演奏者として活動している。藝術大フィルハーモニア管弦楽団ヴィオラ奏者。

齋藤 彩 Aya SAITO (ヴィオラ)



桐朋女子高等学校音楽科、同大学、同ガレッジディプロマコースにて学ぶ。第49回、50回学生音楽コンクール東京大会入選。ヴィオラスペース、プロジェクトQ、東京オペラの森、サイトウキンシロ室内楽講習会、小澤塾、ロストロボーグイチ、小澤征爾率いるキャラバンコンサート、今井信子小樽マスタークラス 等、多数の講習会や演奏会に出演。ヴァイオリンを故・久保田良作、立田あづさ、ヴィオラを店主眞積、室内楽を故・岡田信夫、藤井一興の各氏に師事。室内楽やオーケストラ、舞台音楽に携わるなど岐にわたる演奏活動を行なっている。相模原弥栄高校音楽科非常勤講師。

松本卓以 Takui MATSUMOTO (チェロ)



東京藝術大学卒業、同大学院修了。在学中に福島賞受賞。藝大定期にてサン=サンスのチェロ協奏曲を協演。現在は、バロックから現代、タンゴまで精力的に演奏活動を展開している。特に現代作品では作曲家との協働作業に力を入れており、これまでに350曲以上の初演を行ってきた。クアルテット・アルモニコ、エレメンツ・クアルテット、Ensemble Contemporary α、アンサンブル東風、小松亮太&オルケスタティピカのメンバー。アンサンブル・ノマドレギュラーゲスト。東京藝術大学管弦楽研究部、同附属高校非常勤講師。

細井 唯 Yui HOSOI (チェロ)



東京音楽大学弦楽科を首席で卒業。第54回鎌倉学生音楽コンクールチェロ部門第1位及び野村光一賞受賞。2016年宗次ホール弦楽四重奏コンクール聴衆賞受賞。プロジェクトQ、北九州国際音楽祭、武生国際音楽祭、などに出演。これまでにチェロを久保田顕、佐藤明、久武麻子、舛田雅治、ドミニー・フェイギン、中木健二の各氏に師事。インドネシア国立芸術院(ISI)パダン・パンジャン校、客員教授。